

「神のものは神に返しなさい」 マルコによる福音書 12章 13～17節

マルコ福音書は11章から都エルサレムでのイエスさまの最後の一週間を描きます。ちょうどその時、都エルサレムではユダヤ教最大のお祭り、過越祭が行われており、多くの巡礼者が集まっていました。そんな中、イエスさまは、日中はエルサレム神殿で人々に教えを語り、夜になると近くのベタニヤ村に宿泊する生活を繰り返しておられました。

イエスさまがエルサレム神殿で、宮清めの事件を起こされた事、神殿の異邦人の庭で商売をしていた人々を追い出された事をきっかけにして、ユダヤの政治的宗教的指導者たち、最高議会の議員たちとイエスさまは激しく対立することになります。そして彼らは何とかしてイエスさまをわなにはめ、殺す口実を見つけようと必死になります。

今日の話もユダヤの最高議会の議員たちが人々を遣わして、イエスさまをわなにはめようとする話です。今日の聖書には、ファリサイ派とヘロデ派の人たちがイエスさまのもとに遣わされてきます。彼らは全く政治的立場が異なる人たちです。ローマ帝国の支配に対してファリサイ派は反対で、ヘロデ派は賛成の立場です。いつもは喧嘩している左派と右派が、イエスさまを殺そうとする共通の目的のために協力しているのです。

彼らはイエスさまのところにやってきて、散々心にも思っていないお世辞を言いまくって、イエスさまをいい気分させ、油断させようとします。

その上で彼らはイエスさまに非常に意地悪な質問をします。

14節「ところでローマ皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか。適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか。納めてはならないでしょうか」

ローマ皇帝への納税の問題は極めて政治的な問題であり、かつ宗教的な問題で、意見が分かれ対立している事柄だったのです。紀元前63年にローマの将軍ポンペイウスが都エルサレムを占領して以来、イスラエルはローマ帝国の支配下に置かれました。ローマ帝国はユダヤ地方の領主にヘロデ・アルケラオを任命しますが、うまく治められなかったため、その身分を取り上げ、代わりにローマからユダヤ総督を送り、直接統治します。ローマ帝国は人口調査をし、農産物にかかる税金の他に、一人いくらという人頭税をユダヤ人に課しました。ユダヤ人にとって、この人頭税は大きな負担であるだけでなく、ローマ帝国に力で抑えつけられ従わされている屈辱の象徴でもあったのです。この人頭税を納めるかどうかは大問題で、ファリサイ派とヘロデ派は正反対の立場をとっていました。ファリサイ派の人々はローマ帝国からのユダヤの分離独立運動に賛成の立場で、神の戒めである律法を厳守する立場から、ローマ帝国への納税には反対でした。ヘロデ派はヘロデ・アンティパスの支持者で、ローマ帝国に協力し、現体制を維持する立場なので、ローマ帝国への納税には賛成でした。14節の彼らの質問は、どちらに答えてもイエスさまが攻撃されるように仕組まれていたのです。もしイエスさまがローマ皇帝への納税を認めれば、ファリサイ派が神に背く者だといってイエスさまを追求することができますし、

逆に、イエスさまがローマ皇帝への納税に反対すれば、ヘロデ派がローマ皇帝への反逆者として、イエスさまを訴えることができたのです。イエスさまは彼らのわなを完全に見抜いておられました。そして彼らにデナリオン銀貨を持って来て見せなさいと言われました。デナリオン銀貨はローマの通貨で、1デナリオンは労働者一日分の賃金です。デナリオン銀貨にはその時のローマ皇帝の肖像と銘が刻まれています。今日の聖書のお話の時点でのローマ皇帝は2代目のティベリウス皇帝でした。皇帝ティベリウスは、自分は神だと言っていました。その皇帝礼拝を広げる手段としても、このデナリオン銀貨は使われていたのです。信仰あるユダヤ人は、ローマ皇帝を神としているこのデナリオン銀貨は使いたくなかったのです。しかし実際、ローマ帝国の支配下で生きていくためには使わざるを得ませんでした。しかも屈辱的なローマへの納税にもこのデナリオン銀貨が使われたのです。

イエスさまはデナリオン銀貨を持って来させ、これは誰の肖像と銘かと問われました。彼らは「皇帝のものです」と答えざるを得ませんでした。するとイエスさまは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言われたのです。このやり取りを聞いていた人たちはイエスさまの答えの鮮やかさにビックリしてしまいます。イエスさまは彼らのわなをかいくぐっただけでなく、もっと大事な事を教えようと言われたのです。それは最後の「神のものは神に返しなさい」という言葉です。この「神のもの」とは何のことでしょう。神の像が刻まれているもので、神の所有物とは私たち人間のことです。創世記1章27節で「神は御自分にかたどって人を創造された」と書かれています。創造主である神さまは私たち人間を神の形、神に似た者として特別につくってくださいました。私たち人間は人格を持ち、ロボットではなく、自分で考え、自分の自由な意思で神さまに応答できる存在として神さまにつくってもらったのです。

私たち人間は、本当は誰のものでしょうか。皇帝や王のものでしょうか。国のものでしょうか。自分のものでしょうか。いや、違います。イエスさまは、私たち人間は創造主である神さまのものだと言っておられるのです。そしてイエスさまは神さまに背を向けている私たちを創造主である神さまのもとに、そのご支配の中に連れて帰ろうとしてくださるのです。そのためにイエスさまはこの地上に来てくださったのです。

この地上の命は一つしかない大切な命です。そして限りがあります。必ず終わりが来ます。

この地上の命は自分のものではなく、神さまから預かっているもので、いつか神さまにお返しする時が来るのです。自分の命は自分のものだと思っていると、自分のものなのだから、自分の自由に使うのだとなります。自分の命が神さまから預かっている大切な命だと思っていると、この命を少しでも神さまの喜ばれることのために用いて行こうとなると思います。

この地上で生きていくといろんなことが起こります。でもどんなことが起ころうとも、究極的には、私たちは創造主である神さまのものなのだ。この私の命を愛してくださる神さまから預かっている大切な命なのだということを忘れないで生きていきましょう。そのことを忘れなければ大丈夫です。「神のものは神に返しなさい」